心理的安全性を生み出す絵本リトミックの可能性
－保育者に対する実践と調査を基に－

大　浦　知　加*

A Potential for Eurhythmics of Picture Book Creating Psychological Safety
－Based on Practice and Surveys of Childcare Workers－

Tomoka Oura

【キーワード】表現、音楽、ピアノ、絵本リトミック、心理的安全性
Expression, Music, Piano, Eurhythmics of Picture Book, Psychological Safety

1．研究の背景と目的

1989 年に幼稚園教育要領が改訂され、保育内容の音楽リズムや絵画製作が「表現」というひとつの領域となり、子どもたちの表現活動は、「子どもたちが生きていくということのための表現力を育てる」方向へと転換されてきた（岡本ら 2020：8-12）。表現活動は、決められた正解や完成形に向かい、子どもたち全員に同じ表現をさせることではなく、日々の生活や活動の中で、子どもたちの様々な興味や気づきから、それぞれの自由な表現を導くという、その過程が重要になろう。そのためには、子どもたちの自由な表現を導き、受け入れていくための環境が必要になる。本研究では、日常の生活の中で行うことができ、主体的で自由な子どもたちの表現力を育む可能性のある「絵本リトミック」を、保育者を対象に実践し、その効果を示すことを目的とする。

2．心理的安全性のある環境

心理的安全性の概念を提唱したのは、ハーバードビジネススクールでリーダーシップや組織論の研究を行っている Amy C. Edmondson（2014：153）教授であり、この言葉を広めたのは Google 社である（工藤ら 2021：43）。Edmondson は、心理的安全性を「関連のある考えや感情について人々が気兼ねなく発言できる雰囲気」であると定義する。工藤ら（2021：44-83）は、そういった環境では、その人が本来持っている思考や意志決定等のさまざまな高次機能を担う前頭前皮質の機能が邪魔されにくいため、アイデアや疑問や懸念を、積極的に口に出すことができる、と説明する。そして、社会や組織やコミュニティの基盤となる、「チームが機能する」心理的安全性のある環境は、ミスをしたり手助けを求めても、「拒否をされる」「罰せられる」「評価を下げられる」ことがないという確信と信頼によって保証さ

所属および連絡先
＊大阪千代田短期大学

れることが示されている（Edmondson 2014：44）。青木（2022：40）の調査によると、現在、心理的安全性は、医療や看護、経営学等、さまざまな領域において検討されているが、保育・教育分野における心理的安全性について検討されたものは少ない。教育の分野では、亀山ら（2021：229）は、中学校における学級内で、スクールカーストが高位ではない生徒は、意見交換や議論におけるストレス反応が有意に高いことを示し、学級内における心理的安全性が、意見交換や議論に影響を及ぼすことを明らかにした。一方、松田ら（2021：33）は、幼稚園入園児の居場所づくりと遊びの組織化の関係に着目し、心理的安全性について検討した。それは、子どもたちは園生活を過ごす中で、「これがしたい」という気持ちや、「自分はこれでいいのだ」という気持ちで過ごすことができる居場所を、子ども自身が見つけ、教師や友だちに認められることで作られていくことを確認している。更に、そのためには、できることを目指すのではなく、子どもがそれぞれの安定、安心を基盤にして園生活や遊びに自信をつけることが大切である、と論じている。

また、工藤ら（2021：80-83）は、周囲の大人たちの言葉かけにより、子どもたちの主体性や自己決定する力を育むためにも、心理的安全性が必要であると主張している。それには、「子どもを否定しない」「やりたいと思うことを尊重する」「子どもなりに試行錯誤を経験させる」という方法が効果的だと説いている。更に、「失敗しても大丈夫である」という環境を提供し、そこで子どもたちに積極的にトラブルを体験させ、そのネガティブな記憶をポジティブな学びに変えていくことが重要だと主張する。

大浦（2019）は、保育者養成校における表現活動７つのプログラムの実践から、保育者養成校の学生たちの表現力を涵養する環境には、「間違いのない世界」「学生の表現を全て受容する世界」が必要であることを示した。そしてその世界は、受け取る側が自分の感性で自由に受け取っても、全てを承認される「音楽」の中で遊ぶことによって、提供することが可能になると報告している。これは、工藤ら（2021）や Edmondson（2014）が、子どもたちが成長する環境や、大人社会でチームが機能する環境として必要だと主張する「心理的安全性」と通じるものである。

３．絵本リトミックとは

絵本リトミックとは、決められた正解や完成形に向かう活動ではなく、幼稚園教育要領等の「表現」のねらいとされている「子どもたちが、感じた事や考えた事を自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点で考えられた「日常の生活の中で行うことができる、感覚間協応[1]に基づく表現活動プログラム」である（大浦：2021）。これは大浦（2019）が、実践を通して構成した「保育者養成校における表現活動７種のプログラム」（「音楽×リズム」「音楽×身体」「音楽×言語」「音楽×造形」「音楽×身体×造形×言語」等）の中にある「音楽×身体×造形×言語」の一方法である。「音楽×身体×造形×言語」という総合表現活動では、劇やオペレッタ等の発表会として行われることが多いが、そういった特別な１日に向かう表現活動では、「完成」に向かう目的の割合が多くなりがちである。そのため、絵本リトミックは完成に向かう活動ではなく、日常生活の中の、表現活動の過程を重視するために考案された表現活動であり、７つの要素から構成されている（表１参照）[2]。

表１　絵本リトミックの要素

① 日常の生活の中で身近にあり、すぐに準備でき、想像の世界へ移動できる
② 聴き慣れた人の声、アコースティックな楽器（ピアノ）という環境
③ 完成形に向かうのではない、間違いのない表現活動
④ 子どもの表現を全て受容・肯定し、プロセスを重視する
⑤ 子どもが主体的に関わり、意欲的に表現できる工夫をする
⑥ 子どもが身体を通して表現できるように工夫をする
⑦ 感覚間協応に基づく

（出典）筆者作成

大浦（2021）は、勤務校の教員免許証更新講習を受講した保育者 76 名に対する「最近の子どもたちの表現方法の変化や、気になっていること」についてのアンケート調査から、子どもたちの「自分を出せない、表現に対する苦手意識、表現する力がない」という気になる姿を示した。そして、日常的によく行われる表現活動が「絵本読み」と「音楽活動」であるという結果から、子どもたちが生きていくということのための必要な表現力を育てると考えられる「絵本リトミック」が、保育現場に適していることを論じた。

絵本リトミックの特徴は、子どもたちの様子を見ながら、保育者がその場で「ピアノ」と「声かけ」で即興的に語りかけ、子どもたちの表現の全てを受容することによって生まれる「心理的安全性」のある世界の中で、子どもたちの主体的で自由な表現を誘導し、育むことである。そのため、「①子どもたちの自由な表現を支える環境」「②子どもたちの自由な表現を導く方法」「③保育者の自由な表現を支えるピアノ即興奏法」という 3 つの視点を支える工夫を取り入れている。

４．研究の方法と目的

（１）研究の目的

本研究は、日常の生活の中で行うことができ、主体的で自由な子どもたちの表現力を育む可能性のある「絵本リトミック」を、保育者を対象に実践し、その効果を示すことを目的とする。

（２）研究方法

①　実践日時：2021 年 8 月 3 日・4 日、11 月 27 日・28 日（4 日間の内、それぞれ 75 分）

②　実践場所：O 短期大学　リズム室

③　対象者：教員免許状更新講習「音楽表現」を受講した保育者 43 名（回収率は 100％であったが、小学校教員の方を分析から除外したため、分析対象者は 41 名であった。）

（３）調査方法

アンケート調査では以下の 5 項目について質問した。

①　勤務先（幼稚園・保育所・認定子ども園・それ以外）

②　絵本リトミックの活動について保育現場で役に立つ内容だと感じたか

③　絵本リトミックの活動を現場で実践したいと感じたか

（②③については「感じなかった〜感じた」までを1〜4の4件法の選択とした。）

④　③についての理由を自由記述

（④については、KH Coderによるテキストマイニングの手法で言語的分析を行い考察する。出現回数3回以上の語を抽出し、描画する共起関係は上位60。）[3)]

⑤　絵本リトミックピアノ即興奏法「白黒の魔法」（大浦考案）を体験することにより、ピアノの苦手意識は変化したか

（⑤については「増加した〜減少した」までを1〜4の4件法の選択とした。）

⑥　ピアノ即興奏法「白黒の魔法」を体験した感想（自由記述）

⑦　子どもたちに、表現することに関してどのような力を育みたいか（自由記述）

（4）倫理的配慮

本研究は筆者の所属大学による研究倫理委員会の承認を得て実施された。アンケート調査は無記名とし、個人が特定されないよう配慮した。また、調査の趣旨、研究のための処理・集計の目的以外では利用しないこと、本論文への報告書内容の掲載について説明し、承諾を得ている。

5．3つの視点を支える工夫

（1）子どもたちの自由な表現を支える環境

言語によるコミュニケーションという客観的共有空間では、しばしば互いが抱く現実の相違ゆえに不一致や誤解が生じてしまうことがある。しかし、音楽は、時空間を共有することで、言語で伝えられないものを補い、一人と一人、あるいは多数と多数とを間主観的に関わることができるという特質がある（Stephen他2018：11-12）。つまり音楽は、目に見えない何かを伝え合ったり、共感やこころの触れあいを生んだり、行動に影響を与えたりする、コミュニケーションの媒体であり（Dorothy他2012：427）、受け取る側がそれぞれに自由な理解をすることが可能である。そのため、ただ一つの正解や、間違いという概念はなく、自分の理解や表現が全て受容されると考えられる。大浦（2019）は、こういった音楽の力を生かし、保育者養成校の学生たちの表現が、全て受容される環境を提供することによって、学生たちは安心して主体的に表現できる、ということを示した。このことから、子どもたちも同じように、自分の気持ちや表現が全て承認される、受容される、という環境が、表現力を育むために必要であると考えられる。この、自分の気持ちや表現が全て承認され、受容される「全受容、全承認」という環境は、前述にもある「心理的安全性のある環境」と合致する。

以上のことから、絵本リトミックでは音楽の特徴を生かし、「子どもの表現を全て受容する」ことを基本としている。

（2）子どもたちの自由な表現を導く方法

小西（2003：146-147）は、「語りかけには語り返し」があることが大切であると同時に、「読み聞か

せ」にも「本を通じて気持ちのやり取りをする」ことに基本的目的があり、どのようにコミュニケーションをとるか、というところに意味があると説く。また、田島ら（2018：31-52）は、歌いかけ、読み聞かせ後の展開活動は、子どもの思考活動の成果を、子ども自身が外に表明する実践の場であり、子どものこころの成長に重要であると論じている。

絵本リトミックにおける語りかけには、ブルーナの研究によって証明されたと言われている、子どもの言語発達の足場となる四つの基本的会話「注意喚起（見て！）」「質問（これは何？）」「ラベルづけ（それは○○よ）」「フィードバック（そうね）」の型（田島ら 2018：246-248）を取り入れている。それに加え、加藤（2020：82）の紹介する「ダイアロジックリーディング」の、「①質問」「②質問に対する子どもの答えの拡張」「③子どもの答えの反復」「④決まった答えのないやりとり」「⑤文章を完成させるやりとり」「⑥ストーリーを思い出させるやりとり」「⑦子どもの生活と関連した質問」という 7 つのやりとりで、語りかけを膨らませていく。ねらいは、子どもに何か発言するように「a.促進」し、子どもの発言に対して「b.評価」し、子どもの発言を「c.拡張」し、子どもの理解を促進させるために「d.反復」することで、「自分の頭で考える力」「自分の意見を伝える力」「自分が得た知識をどう使うか」といった力を育むことである。

一方、身体からの語りかけとしては、シュタイナーの身体表現教育の考えを参考にしている。シュタイナーの身体表現教育では、子どもたちの模倣を重視するため、教師の模範が重要となる。子どもたちは、自分の力のみで独創的に身体表現を生み出すことはできず、周囲の人々が示す模倣を求めている、という考え方である。しかしそれは、教師の動きを強制的にさせるということではなく、子どもたちは、自分の意志で模倣する力が備わっているので、時間がかかっても自分の意志で模倣することができるようにすることが大切である、と広瀬（2018：47-53）は主張する。

以上のことから、絵本リトミックでは、保育者の「言葉と身体による語りかけ」によって、子どもたちの何かを表現したい、という欲求を拾い上げ、関わり、子どもたちが主体的に表現していくようにサポートすることを取り入れている。こういった関わりは「子どものリトミック」の特徴とも合致する。神原（2013：16-17）は、子どものリトミックでは、子どもたちは保育者と音楽の関わりによって、からだや空間を認識し、自分のからだをコントロールするという感覚にも働きかけ、気持ちを表現したり、周りと気持ちを通じ合わせたりして、自己効力感や協調性といった非認知能力を育むと説いている。

（3）保育者の自由な表現を支えるピアノ即興奏法「黒白の魔法」

保育現場でピアノを使う理由は、子どもの「複雑な音の選別が難しい」「歌や音楽が包含する多様な感情性を聴取する」という特徴から、「聴き慣れた人の声」や「アコースティックな楽器の音」が、子どもにとっての心地よい音や声であるためである（小西ら 2017：100-108）。また、ピアノは、子どもたちを待たすことなく、蓋を開けるとすぐに音を出すことができ、表現力の幅が広い。そのため、保育現場ではピアノが重宝され、保育者養成校ではピアノ技術を習得することが必要とされている。しかし、ピアノ演奏には、指や目だけではなく、様々な感覚の訓練が必要であり、ピアノ初学者の学生たちにとって 2 年間で習得できる技術は限られると考える。子どもの頃に専門的なピアノ奏法の訓練を受けてきた人にとっては、左右 10 本の指を複雑に動かし、左右の足でペダルを操ることは、たくさんの神経細胞

を働かさなくてもできる簡単な動きである。それは11歳までの練習時間に比例して、神経細胞が発達してきたからだと言われている（古屋 2012：17)。演奏家は、長年の訓練によって、目や皮膚、動き、耳といったさまざまな感覚を脳の中で統合できるようになっており、楽譜を見ただけで、身体を動かす脳の回路が働くことがわかっている（古屋 2012：95)。そのため、ピアノ初学者にとっては、保育者になっても努力し続ける必要のある表現技術であろう。しかし、努力を継続するためには、「成功体験」や「楽しさ」を感じることが必要になってくる。また、楽譜は、時間芸術である音楽を再生でき、一人で音楽を奏でられるようになるため、非常に重要で価値のあるものではあるが、まず、楽譜を読む段階で躓く学生もいる。ピアノ訓練の一方法として、楽譜もなく、今の自分の力量に合わせてピアノを奏でられる方法があり、「成功体験」や「楽しさ」を感じることができれば、楽譜を前に努力を継続することにも相乗効果があると期待できる。

大浦（2019）は、実践を通して構築した「保育者養成校における表現活動７種のプログラム」内で、「白黒の魔法」という初学者のためのリトミックにおける、楽譜のないピアノ即興奏法を考案し、それを体験した学生たちの、ピアノに対する意識が前向きに変化したことを示した。以上のことから、絵本リトミックでは「白黒の魔法」ピアノ即興奏法を取り入れている。

白黒の魔法　　おおうら作

1.　黒鍵とペダルは仲良しだよ～ ✨ ❤
　① 誰とでも仲良しこよし❣
　② キラキラだよ～ ✨

2.　黒鍵と白鍵は微妙な仲だね。。。💦
　① 黒白変身～～☆☆彡
　② お隣さんの仲もあやしいね～ 💦

図１　「楽譜のないピアノ即興奏法　白黒の魔法（大浦考案)」(一部抜粋)

６．活動内容

絵本リトミックに取り入れている３つの視点からの工夫である「①子どもたちの自由な表現を支える環境」「②子どもたちの自由な表現を導く方法」を事前に説明し、「③保育者の自由な表現を支えるピアノ即興奏法」を体験してもらい、実践に移った。絵本は、「たんたんぼうや」「文：かんざわとしこ、絵：やぎゅうげんいちろう　福音館書店」を使用した。絵本の内容に合わせ、筆者の身体や言葉による語りかけにより、受講者の方々の表現を引き出し、「白黒の魔法」ピアノ即興奏法による効果音でその表現を支えていった。

表２ 「8/4 絵本リトミック」活動の様子（一部抜粋）

2021. 8/4 「絵本リトミック」活動時
◎「たくさんの出会いをしながら歩く、タンタン坊やを描いた絵本」を最後まで読む。 ◎筆者が「誰が最初に歩いて来た？」(a.①）と、保育者の方々とストーリーを思い出させるやりとり（⑥）をする。 ◎「たんたんぼうや！」という保育者の声に、「良く覚えていましたね！」(b.)「どんな風に歩いていた？」と質問する。 ◎「元気に！」「楽しそうに！」という声の一つ一つに「そう、元気よかったよね」「楽しそうだったよね」と、答えの反復（d.③）をする。 ◎そして、「何か嬉しいことあったのかしら？どんな風に歩いていたのかしら？たんたんぼうやみたいに楽しそうに歩いてみましょううか？」と、発言を拡張（c.②)し、それぞれの自由な想像が膨らむように決まった答えのないやりとり（④）をし、白黒の魔法に沿って即興的にピアノを奏で、保育者の方々の動きをサポートする。 ◎「〇〇さんのたんたんぼうやはとても嬉しそう！ 何か嬉しいことあったのかしら」等、歩く姿を捉えて語りかけをする（b.)。保育者たちは笑顔を交わし合いながら歩く。 ◎「たくさん歩いたから、喉がかわいたわね。あら？ どこかで水の音がするわ。何かしら？」と、生活のなかで想像できるような場面を設定し(⑦)語りかけをし、想像が拡がるような白黒の魔法に沿った即興演奏をする。保育者たちはそれぞれ、周りを見渡したり、笑顔と言葉を交わしながら水をすくって飲むような表現をし始める（④)。 ◎「わぁ〜〇〇さんのお水、とっても美味しそう！」と、それぞれの全ての行動を肯定していく(b.)（「心理的安全性）の確保)。 ◎「あら？ 何か聞こえるわ」と、何かの足音をピアノで表現し、「こ〜んな尻尾を持って木に飛び乗った！ 誰かしら？」と、ピアノと身体と言葉で語りかける（⑥)。保育者たちは素早く、笑顔で言葉を交わし合いながら、思い思いの動物の振りをし始める。 ◎「楽しそうに動いている〇〇さんは何に変身したのかしら？」(b.）と語りかけ、「バナナを持ったサル！」と言う答えに、「まぁ！よく覚えていたわね、おサルさんが歩いてきていたわよね、バナナを持っているのね」と、答えの反復（d.）をしながらストーリーを思いださせ（⑥)、それぞれが拡張させたストーリーに対する肯定の語りかけをしていく。(b.c.）（「心理的安全性」の確保） 以上のように、「身体・言葉・ピアノ」による語りかけをしながら、絵本の中に入り込み、想像の世界の中で遊ぶ。 （※本稿５(2)「語りかけ方法」による番号とアルファベットを記している。）

7．考察と今後の課題

アンケート調査結果から

（1）勤務先（幼稚園・保育所・認定子ども園・それ以外）

「子ども園 24 名」「幼稚園 6 名」「保育園 8 名」「その他 3 名（離職中）」であった。

（2）絵本リトミックの活動について保育現場で役に立つ内容だと感じたか

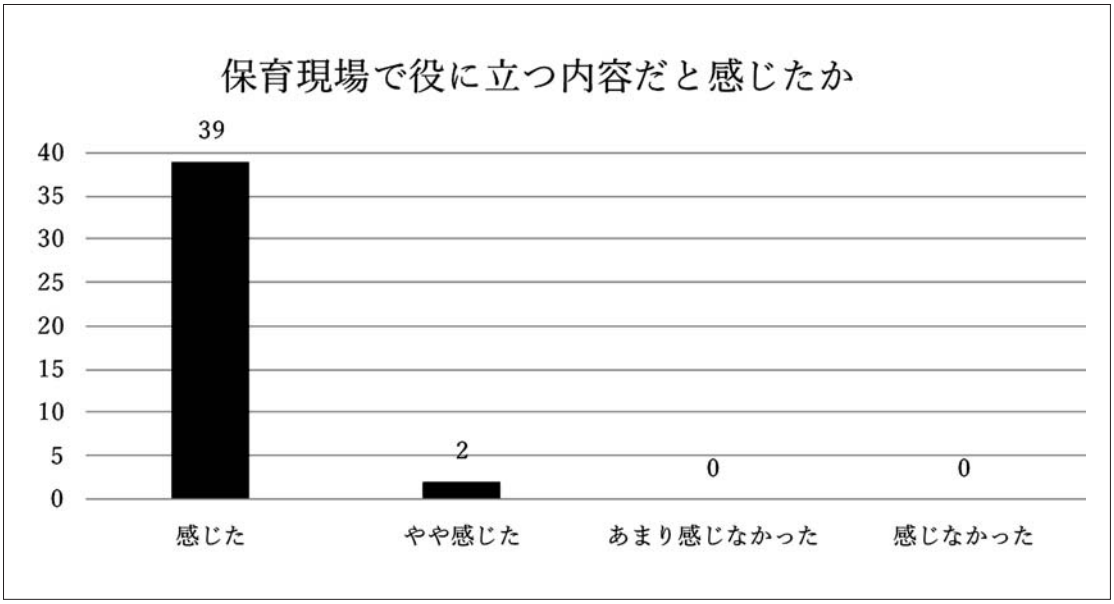

図 2　保育現場で役に立つ内容だと感じたか

（3）絵本リトミックの活動を現場で実践したいと感じたか

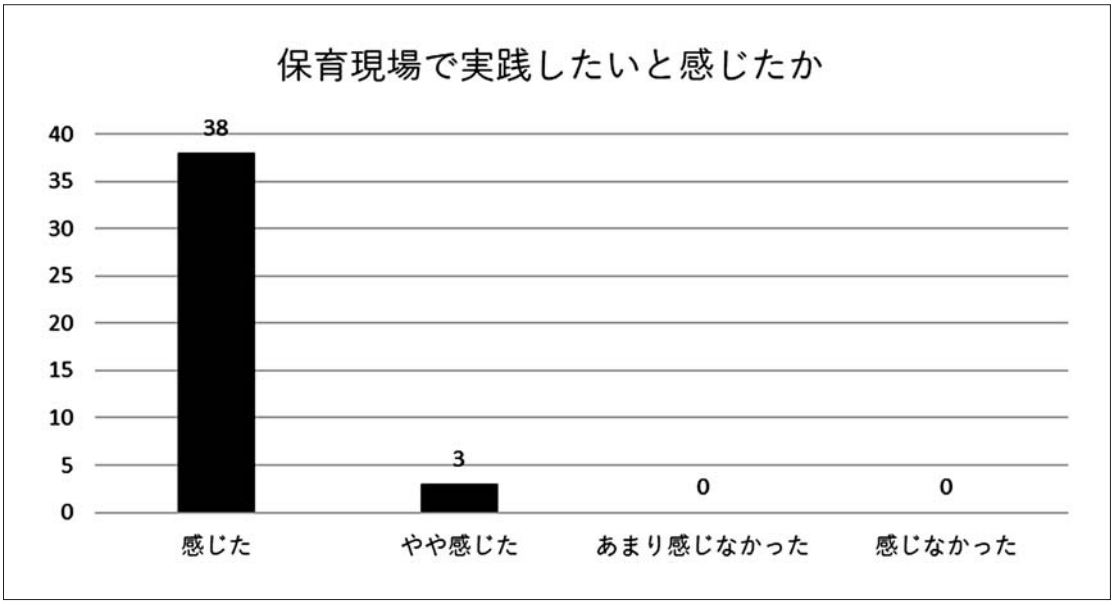

図 3　保育現場で役に立つ内容だと感じたか

（4）（2）（3）についての理由

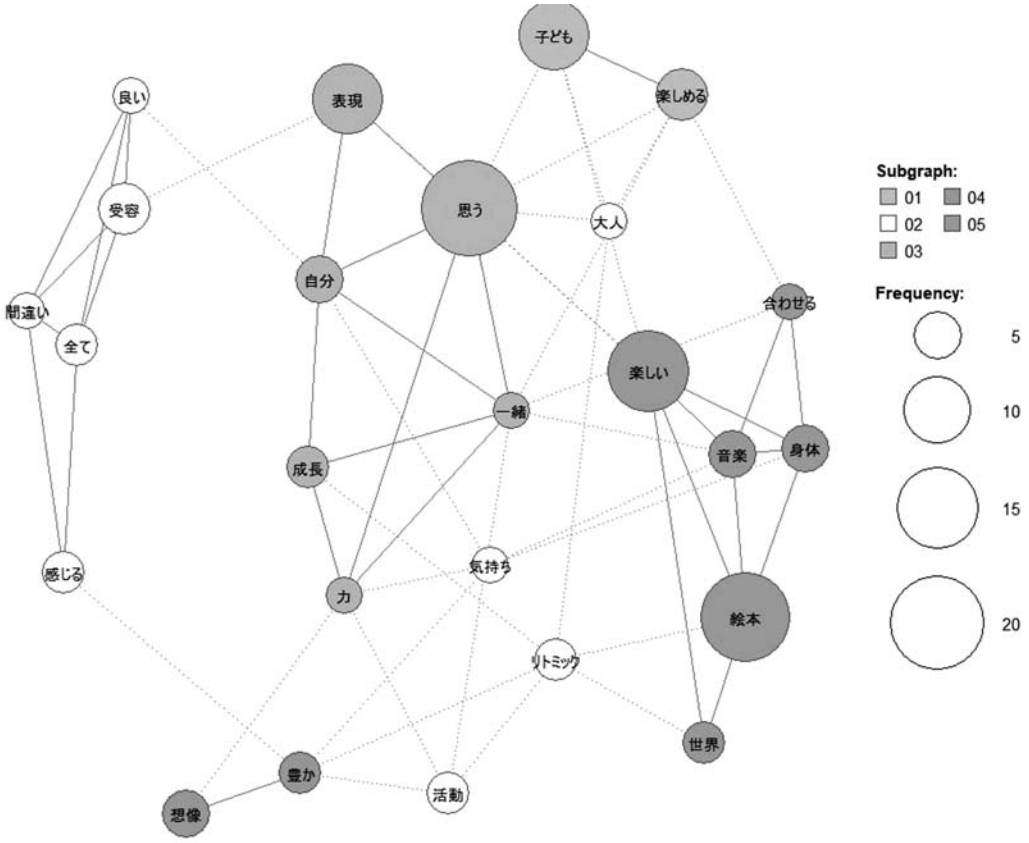

図４　「現場で役に立つ内容だと感じた、実践したいと感じた」理由

「現場で役に立つ内容だと感じた、実践したいと感じた」理由は、図のように５つのグループに整理できる。

１つ目は、「保育者の声かけの仕方で表現の幅が広がる。」「絵本の内容通りだけでなく、保育者が教えたいことを取り入れながら楽しく伝えられる。」と、現在の状況をより良く広げていく活動にできる、と感じていた。

２つ目は、「身体が勝手に動いて楽しかった、子どもの笑顔が目に浮かぶ。」「大人が楽しかったのだから、子どももきっと楽しいと思う。」と、実際に自分が体験して楽しかったから、子どもたちと共有したい、という期待であった。

３つ目は、「普段、子どもたちを全て受容できる機会がなかなかない。絵本リトミックを全受容してあげる時間にしたい。」「間違いがないと聞いて、自分も安心して表現できた。子どもたちにも体験させ、自信をつけさせてやりたい。」「自分たちが想像もつかない発想を認めてやることで自信に繋げられる。」「みんなで共感し合い楽しめた。日本の学校は自信をなくすことばかりだから、こういったあそびが良い。」「人それぞれ感性が違うので、同じ題材を使っても違う表現になることが面白かった。」というように、心理的安全性のある環境と、一人一人を認めることで自信をつけさせる活動にしたい、という願いであった。

４つ目は「グループになり活動する時に、相手を思いやるルールもあり、人の気持ちを思いやるなど、

いろいろな成長ができる。」「集中力、聴く力、想像力、思いやり、様々な面で伸びると思う。」と、子どもたちが成長する活動であると感じていた。

５つ目は、「発表することも大事だが、それまでの過程が大事だと気付いた。」「月齢に合わせて取り組める。」「絵本があることによって、想像しにくい子どもでも他の子と同じ景色を共有できる。」「絵本の内容に合わせて、音楽を聴きながら身体を自由に動かし、絵本の世界に入り込めることが、こんなに楽しいとは。」「絵本と音楽を融合することで世界が広がる。」と、絵本と音楽、身体表現等を融合することによって広がる世界への期待と、その効果について感じていた。

一方、「言葉、身体」による語りかけに不安な記述はなかったが、「ピアノ」による語りかけに対し、「簡単なピアノ奏法はわかったが、すぐに想像して表現できるかが不安。一人で絵本リトミックを展開する自信がない。」という記述もあった。

（５）絵本リトミックピアノ即興方法「白黒の魔法」によりピアノの苦手意識は変化したか

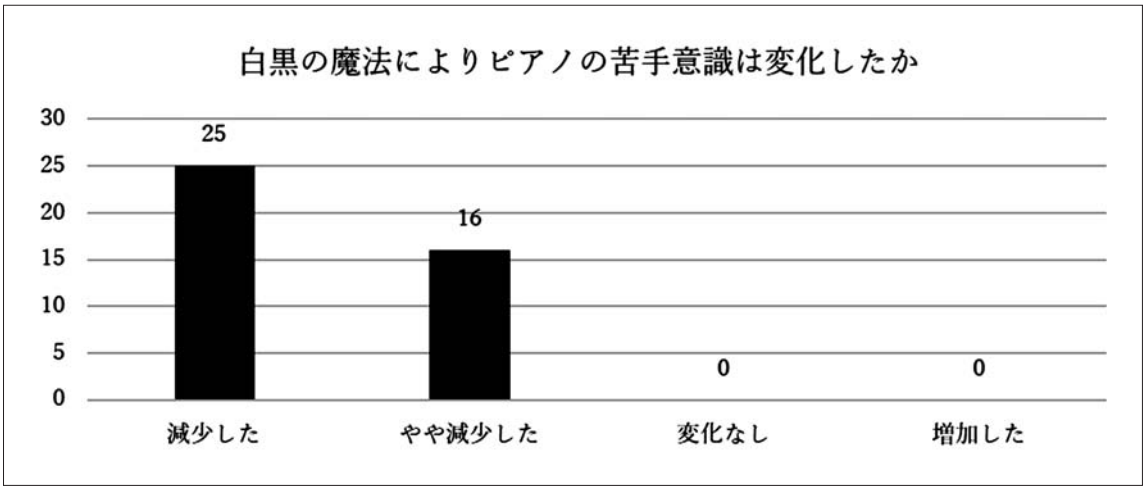

図５　白黒の魔法」によりピアノの苦手意識は変化したか

(6) ピアノ即興奏法「白黒の魔法」を体験した感想

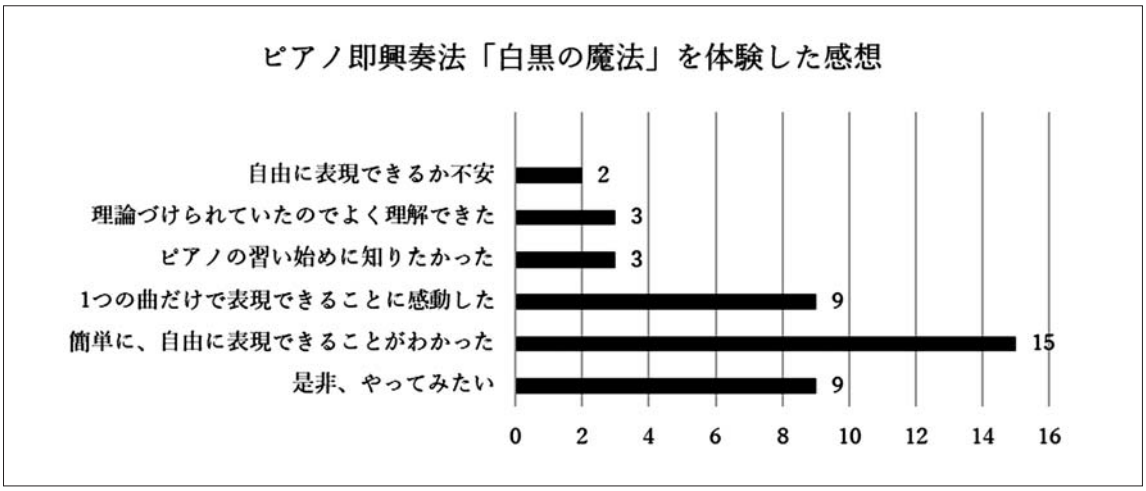

図６　「白黒の魔法」を体験した感想

「白黒の魔法」奏法を体験した感想には、「ピアノは、楽譜を見て曲を弾かないといけないと思い込んでいた。」「ピアノの習い始めに知っていればピアノを苦手にならなかった。」「ピアノが苦手な私でもできそう。」「ピアノが苦手なため、リトミックにも苦手意識があったが、この方法にすごく感動した。」「何となくの感覚で弾いていたが、理論もわかり納得できた。」というように、前向きにチャレンジしたいと感じた受講者が多かった。一方、「簡単にできることはわかったが、即興的に自分ができるかは不安だ。」というように、簡単にできることはわかったが、いざその場で即興的に、その場面に合う音色を思い浮かべられるか、ということに不安を持った受講者もいた。

（7）子どもたちに、表現することに関してどのような力を育みたいか

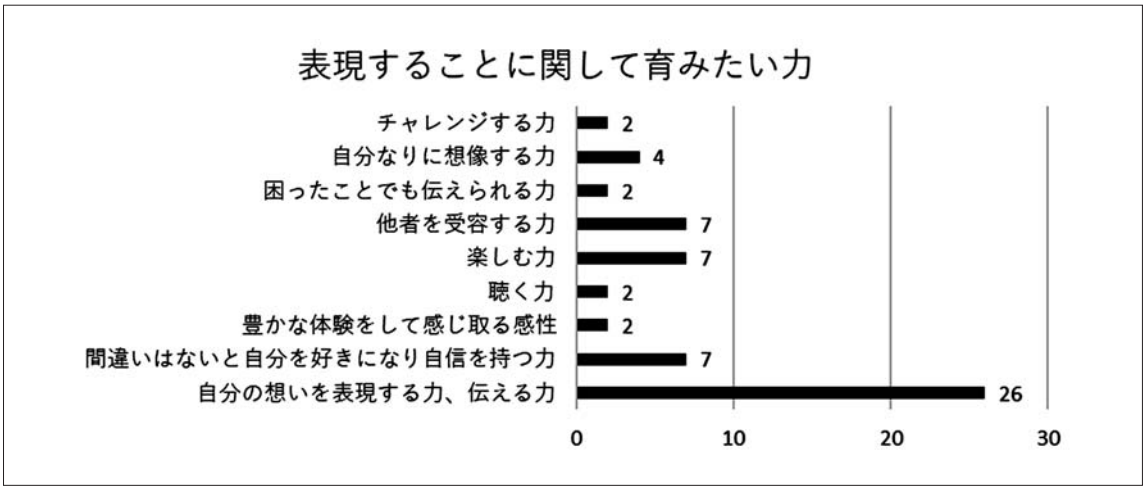

図7　子どもたちに、表現することに関して育みたい力

子どもたちに、表現することに関して育みたい力の自由記述には、「自分の想いを表現する力、伝える力」が多かった。他にも、「自分を好きになって、自信を持って生きられるよう、子どもたちの個性を肯定、受容し、表現する力」「自分の気持ちを素直に周りの人たちに伝えられる力」「聴く力をつけて、全ての人を受け入れるこころ」「自由な発想や表現力」「困ったことを伝えられる力」「人と違っても表現できる力」「思いやりを伝える」という力を育みたい、という記述が見られた。これらは全て「他者とコミュニケーションをとる力を育み、豊かな人生を送って欲しい。」という願いに繋がっていた。

8．考察と今後の課題

本稿では、日常の生活の中で行うことができ、主体的で自由な子どもたちの表現力を育む可能性のある「絵本リトミック」を、保育者を対象に実践し、その効果を示すことを目的としてきた。これまでの検証から、絵本リトミックは、子どもたちの表現力を育む可能性のある表現活動であると示すことができた。この大きな理由の一つとして、絵本リトミックは、決まった型に子どもたちをあてはめていく教育方法ではなく、目の前にいる子どもたちの状況に合わせて、保育者による「語りかけ」の内容を変容でき、その「語りかけ」は、それぞれの保育者の持つ力量に合わせて変容できるためであると考えられる。Dorothy は（2012：298-344)、人々は、変化する文化的コミュニティにおいて参加者として発達

し、教育者は、子どもたちが周りと相互作用的なあそびによって発達するコミュニケーターでもありパートナーでもある、と説いている。保育現場では、いつも子どもたちの近くにいて、子どもたちの興味や関心、状況にこころを寄せている保育者だからこそ、型にはまったものや、難しいことだけではなく、目の前にいる子どもたちと、それぞれの保育者の持つ力量に合わせて、関わる内容を変容していくことができる。そのためには、それぞれの保育現場に合わせて変容しながら、深めていくことのできる表現活動方法が求められていると考えられる。

また、普段の保育や子育ての中では、どのような場合でも子どもたちを全て受容し承認する、ということは困難であろう。しかし、子どもたちを受容し承認したいと望んでいる保育者たちは、絵本リトミックの活動から、心理的安全性のある環境が生まれることが可能であり、それが子どもたちの感性や表現力、自己肯定感等を育むことに有効であると感じていることが示された。山口（2004）が言うように、「こころ」が体験の結果生じるものであると考えると、心理的安全性のある環境の中で、成功や失敗等の様々な体験を提供し、その体験から豊かに感じることができる感性や立ち直る力を育むサポートをしていくことが、こどもたちの豊かな「こころ」を育むことに繋がっていくであろう。

今後も、子どもたちの活動をサポートしていくことができる表現活動方法について、更なる探究を重ね、可能性を追求していきたい。

＜注＞

1）髙橋（2015）は、表現領域間の境界が不明瞭で未分化な子どもの表現活動を、認知心理学の「感覚間協応」という言葉で表し、色、音、香り等の異なる領域を結び付ける知覚現象と言い換えることができる、と説明している。

2）筆者は 25 年の音楽現場経験から「幼児のリトミック」としてまとめ、それらを基に、保育者養成校における音楽から拡がる 7 つの「表現」プログラムを構成した（大浦 2019）。

3）「KH Coder」は樋口耕一氏によるテキストデータを統計的に分析するためのソフトウェアである。
KH Coder: 計量テキスト分析・テキストマイニングのためのフリーソフトウェア

＜引用・参考文献＞

青木弥生（2022）「保育領域における心理的安全性」『こども教育宝仙大学紀要 13』

秋田喜代美、佐藤学、里見 実、森 眞理、カンチェーミ・ジュンコ、伊藤史子、松本理寿輝、石井希代子、三井文博、浅井幸子、戸塚陽子、山田寿江、上村香織（2018）『発達 156 号　特集「なぜいまレッジョ・エミリアなのか」』ミネルヴァ書房

Amy C. Edmondson、野津智子訳（2014）『チームが機能するとはどういうことか』英治出版

Dorothy Miell、Raymond MacDonald、David J.Hargreaves 編、星野悦子監訳（2012）『音楽的コミュニケーション心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ』誠信書房

古屋晋一（2012）『ピアニストの能を科学する』春秋社

亀山晃和、原田勇希、草場実（2021）「学級内の社会的地位と実験グループに対する心理的安全性が理科授業における批判的議論とストレス反応に及ぼす影響」『理科教育学研究 62-1』

神原雅之（2013）『1〜5 歳のかんたんリトミック』ナツメ社

工藤雄一、青砥瑞人（2021）『自律する子の育て方』SB 新書

小西行郎（2003）『赤ちゃんと脳科学』集英社

小西行郎、小西薫・志村洋子（2017）『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育 2、運動・遊び・音楽』中央法規

広瀬綾子（2018）「幼児期における『身体表現』の教育―世界に広がるシュタイナー幼児教育を中心に―」『新見公立大学紀要』第 38 巻 2 号

加藤映子（2020）『ハーバードで学んだ最高の読み聞かせ』かんき出版

松田早織、岡山佳耶、宮本雄太（2021）「幼稚園入園児の居場所づくりと遊びの組織化の関係―見立て遊びや生き物探しの事例に着目して―」『福井大学教育実践研究第 46 号』

大浦知加（2019）「保育者養成校における「音楽表現」の授業実践―感覚間協応に基づく授業モデルの開発と展開―」『大阪教育大学初等教育講座実践学校教育研究』第 21 号

大浦知加（2021）「音楽・言語・造形・身体」表現による『創作音楽劇』授業の開発と実践―『MI 理』に基づきそれぞれの強みを活かして―」『大阪教育大学初等教育部門実践学校教育研究』第 23 号

大浦知加（2021）「感覚間協応に基づく表現活動についての一考察―絵本リトミックの提案―」『大阪千代田短期大学紀要』第 51 号

岡田知雄、. 村田光範、鈴木順造、山縣然太朗、前田美穂、原光彦、井口由子 、田澤雄、斎藤伸治、村上佳津美、内海裕美、川上一恵、 仁尾正記、川島章子、横井 匡（2015）「日本小児連絡協議会からの提言　子どもと ICT（スマートフォン・タブレット端子など）の問題についての提言　日本小児連絡協議会「子どもと ICT：子どもたちの健やかな成長を願って」委員会『小児保険研究』第 74 巻 1 号

岡本拡子、花原幹夫、汐見稔幸（2020）『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房

Stephen Malloch and Colwyn Trevarthen 編、根ヶ山光一、今川恭子、蒲谷槙介、志村洋子、羽石英里、丸山慎監訳（2018）『Communicative Musicality 絆の音楽性―つながりの基盤を求めて―』音楽之友社

高橋慧（2015）「 乳幼児期からの複数領域を結びつける表現活動の可能性と感覚間協応に基づく理論的説明」『美術教育学会誌』第 36 号

田島信元、佐々木上部、宮下孝広、秋田喜代美（2018）『歌と絵本が育む子どもの豊かな心』ミネルヴァ書房

『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携認定子ども園教育（原本）』（2017）チャイルド本社

山口創（2004）『子どもの「脳」は肌にある』光文社